

四谷の

千枚田だより



第128号

研修は、千枚田入り口で保存会全員が出迎え、まず、会長（舜）から諸

新入・幹部社員研修受け入れ

四月三日、横浜ゴム(株)新城工場新入社員十一名、幹部社員十四名の研修が行われた。

この研修は横浜ゴム、保存会の両者間に大きな役割を果たしている。第一回の研修で「急傾斜の棚田は生産性も乏しく先人の辛苦を遺産として残す使命感で保存している」と等々の説明に「何とか手助けを」と菓を買って頂いた。横浜ゴムはこれを契機に工場の排出ガス削減に取り組み工場敷内に広葉樹を植栽。企業が二酸化炭素の削減に貢献していることが大きく評価されている。



ビオトープの説明に聞き入る



ボランティア活動(環境整備)

君は厳しい社会人としての第一歩が始まる。この、厳しい棚田の守人の生き様を見て、感じて、挫折のない立派な社員になることを願う。市鳳来総合支所地域整備課片桐課長は皆さんの研修には例年、穂積市長も歓迎に参っておりますが会議が入りお迎えできない。皆さんによるしくお伝えくださいとお言葉を預かってまいりました。有意義な研修になることを祈ります。横浜ゴム新城工場谷口副工場長から保存会の皆さんの暖かいお出迎えに感謝します。本日はよろしくお願いたします。



昼食 猪汁・五目飯を堪能

高低差二百メートルのふれあい広場まで千枚田の概要、歴史、文化、また、横浜ゴムが千枚田において生物多様性定点調査の実施、企業としての姿勢などを織り込んだ説明を行った。

十時三十分からボランティア活動としてふれあい広場の環境整備を保存会員と共に実施。

昼食は保存会手作りの猪汁と五目飯でもてなし、大変喜ばれた。

交流会は松下事務局の軽快な司会で進行。まず、愛知県新城設楽農林水産事務所鈴木建設課長から県として、「ふるさと指導員」を紹介して保存会活動に支援している。また、昨年、環境にやさしい小水力発電が愛知県第一号としてこの場に設置された。等々の挨拶に始まり、新入社員一人ひとりが出身地、また、将



わくわくドキドキの交流会

来の夢などを即席の壇上で語った。幹部社員も仕事は辛い、我慢してきて今の幸せがある。それぞれが困ったことや悩みがあれば遠慮なく上司に相談すればよい。皆、そういう時期を乗り越えてきたから、等々の励ましの言葉を贈った。交流会最後に城川工場長から新入社員はこの研修をバネに挫けないよう頑張っていたほしい。また、この研修を毎年、お受けいただいている保存会の皆さんに感謝します。と述べられた。

帰路はゴミ拾い(ほとんどない)をしながら千枚田入り口へ集結。

顧問の高橋庄一からボランティア活動のご苦労様と大企業へ就職できたことだから一生懸命頑張るようにと励ましの言葉で、全員でお見送りした。

連谷小学校卒業式

原田哲成君、卒業おめでとうございます。今年度は四年ぶりに一名の入学式があり、そして、たった一人の最上級生原田君の卒業式を三月二十日、後輩、七名の先生方、大勢の来賓を迎え、卒業を祝いました。今年度、連谷小学校全児童数は四名になり、たった一人の男子児童として土方君の頑張りを校区ぐるみで見守り励ましましょう。



明治五年創立の連谷小学校も平成二十八年には海老小、鳳来寺小、鳳来西小の四校が統合の予定です。

保存会役員会

四月十九日、鞍掛山麓千枚田保存会の役員会を行います。

連谷お助け隊総会

四月五日、連谷会館において通常総会が行われた。事業報告、会計報告も目の前に酒や肴が並んでの総会。「あつ」という間にシャンシャンと相成った。メンバーは酒が進むにつれ、ロレも闊達に議論が伯仲、結論的には「連谷地域」の発展の柱に、また、千枚田保存継承、地域の脇役など、皆で選んだリーダーとの意思統一を確認、連谷魂の熱い思いを夜遅くまで語りあった。

傘寿を迎えて思う

高橋庄一

「ああ千枚田」
肩に喰い込む重たい畚
悲しい歴史を乗り越えて
守り続ける山里遺産
その名は四谷の千枚田
清き流れの温む頃
田毎に張られた水面にも
早苗を揺らす春の風
その名は四谷の千枚田
見下ろす棚田は黄金色
垂れた稲穂に赤トンボ
喜びいっぱい秋がきた
その名は四谷の千枚田

連谷地区お花見会

四月五日、恒例のお花見会が連谷ふれあい交流館で参加者四十余名をもって盛大に開催された。



当日は、総勢三十余名の撮影隊（映画）でこった返した。この映画製作には「四谷の千枚田だより」が大きく貢献。また、この地域の歴史（山津波など）、文化、生活などの変遷を依頼され、徹夜で纏めたものを資料として送付したりもした。

大女優「樹木希林」さんは当日の

撮影はなく、役づくりのため訪れたもので、（舜）の運転する軽トラで千枚田の案内をしたり、地域の宝としての「千枚田保全活動」や、「むらづくり」の話に大変感銘され、そのエネルギーは何処にあるか、奥さんに一目逢いたいと熱望されたが、女房は「田舎の芋だから」と固辞したものの何でかんでという事で家に寄って頂いた。希林さんは一目みるなり女房（こはる）の手を握り締め「ありがたう。」と二度も三度も頭を下げられ、一緒に写真を撮りましょうとまで言われ夫婦共に一生の感激の一瞬を頂いた。



サプライズとして希林さんにお花見会にお顔を出して頂けないだろうかと打診、無理と言われながらも凶々しくお願いしたところ「私でお役に立つことなら」と心よくお受けいただいた。（舜）（七十三才）と希林さん（七十一才）は腕を組んで会場へ、挙げて向かい参加者に向け、挨拶まで頂いた。お花見会には嘗て無い、記憶に残る嬉しい出来事となった。

行 平成二十六年四月十五日

鞍掛山麓千枚田保存会

文責 小山舜二